

勝海舟全集

第3巻

月報 15
1976年5月

勝海舟の中国像

中嶋嶺雄

目次

勝海舟の中国像

中嶋嶺雄

1

〔校訂こぼれ話12〕

「戊辰の際に於ける日記」考

松浦 玲

4

ついでともいえよう。

勝海舟が日清戦争にたいしては一貫して非戦論ないしは反戦論の立場に立ち、かえって日清韓三国の提携論を唱えていたことについてはよく知られているところである。

「日清戦争はおれは大反対だつたよ。なぜかつて、兄弟喧嘩だもの犬も喰はないぢやないか。たとえ日本が勝つてもドーなる。支那はやはりスフィンクスとして外国の奴らが分らないに限る。支那の実力が分つたら最後、欧米からドシ／＼押し掛けて来る。ツマリ欧米人が分らないうちに、日本は支那と組んで商業なり工業なり鉄道なりやるに限るよ。」

おれなどは維新前から日清韓三国合縦がつじょうの策を主唱して、支那朝鮮の海軍は日本で引受くる事を計画したもののサ。今日になつて兄弟喧嘩をして、支那の内輪をサラケ出して、欧米の乗るところとなるくらゐのものサ。

晩年、赤坂水川に退隠してからの勝海舟は、その警世の饒舌のまにまに、支那（中国）について、かなり多くのことを語っている。

寂知と深慮を以って明治国家の誕生に劃的に参与しながら、その明治国家が日清戦争の勝利を経ることによって、西欧列強といたずらに比肩せんとし、同時に中国への劣等意識から優越意識へと急速に旋回していったとき、海舟は、世俗的にはともかく、彼の理想と我執においては、もはや明治国家から食み出した存在になりつつあったような気がする。そのような海舟は明治国家の多くのエリートたちとは逆に、支那の優位性、ひいてはアジア・東洋の問題の重要性への深い認識へと到達していった。つまり、海舟晩年の数年間、彼は、こと中国認識にかんしては、世間一般とまったく歯車が噛み合わなくな

支那を懲らすのは、日本のために不利益であつた、といふ事を世間の人はいま悟つたのか。それは最初から分つて居た事だ。」(『米川清話』)

右の引川のなかに見える海舟の中国および日清關係についての認識はきわめて鋭い。とはいへ、海舟が明治の群像のなかで高く評価されるにいたるまでに以後半世紀の時間が必要であつたように、海舟の中国像は、今日でこそ歴史の経過に照して着目すべきものであつても、日清戦争の勝利に酔つていた当時の状況においては、やはり非現実的な虚説としてしか映じなかつたのであろう。つまり、欧米文明にたいしもっとも先進的な国際感覚を身につけて世に出た海舟ではあつたが、彼がその晩年に到達したアジア重視の國際關係のヴィジョンは現実によつて拒否され、この点において彼は大きく挫折したのであつた。江藤淳氏は「海舟の書を見ると、日清戦争後、にわかにおいの影がさし、筆勢がおとろえて行くのが傷々しく感じられる」(『海舟余波』、文藝春秋刊)と述べているが、海舟の筆勢のおとろえは、このような挫折とも無關係ではなかつたかもしれない。

だが海舟は依然として、「日本人もあまり戦争に勝つたなどと威張つて居ると、後で大変な目にあふヨ」(『米川清話』)といつづけていたのであつた。

日清戦争に關連して示された海舟の右のような日清韓三國提携論は、明治維新に際し、「二國不和を生ずれば其國滅亡すべし」との國家的使命觀に立脚して朝露相擊

ちて國滅びることを回避せしめた彼自身の体験に照し、欧米列強のアジア進出をまえに日清兩國が相撃つことの愚を避けようとした戰略的構想に基づくものだったともいへなくはないだろう。だが、海舟自身の言論に即して述べらば、そこには、きわめてユニークで着実な中国認識が前提にあつた。

「支那人は、一國の天子を、差配人同様に見ているヨ。地主にさへ損害がなければ、差配人はいくら代つても、少しも構はないのだ。……二戦三戦の勝をもつて支那を軽蔑するは、支那を知る者にあらす。」

「支那人は、天子が代らうが、戦争に負けうが、殆んど馬耳東風で、はあ天子が代つたのか、はあ日本が勝つたのか、などいつて平氣である。……一つの帝室が亡んで、他の帝室が代らうが、國が亡んで、他國の領分にならうが、一体の社会は、依然として旧態を存して居るのだからノ。社会といふものは、國家の興亡には少しも關係しないヨ。」(『米川清話』) たしかに、海舟は明治中期の日本において、今日流に言えば、いわゆる親中國派だったのかもしれない。正確にいえば海舟の支那は清を意味し、清にぞっこん惚れこんでいたように、清の太祖は、千古の偉人だ。あんな傑物は、いづれの世にもあるまいヨ。」とまで語っている。だから、清の宰相・李鴻章、海軍提督・丁汝昌などとは親しく、彼らをきわめて高く評価しているのにたい

して、反清の旗手・孫文については「陳白がよく、連れて来ますから一度逢つてやつてくれと言ふが、忙しからネ。」とだけ述べ、改良派の康有為や梁啓超にかんしては、「日本に倣つて立憲政体を布き、曾木 援助によりて支那の改革を謀ると言つたから、大層怒鳴つてやつたよ。」(元來支那人でありながら、支那の長所を知らぬといふ奴があるか。現今の支那はすなはち堯舜の政治で、日本の立憲政治など真似るといふべラボラオな事はない。……)と語つてやつた。」とさえ語つている。このよう

な清へのシンパシーの底には、しかし、情熱的な海舟の胸中秘かに宿つていた、中国という悠久の伝統世界への静止的認識があつたのであろう。そして、文明の農業性に根づいた中国社会の不易の性格をその本質的なところまで深くとらえていたがゆえに、中国にかんし、「社会といふものは、國家の興亡には少しも關係しないヨ」とまでズバリといきれたのであろう。

こうした海舟の中國認識の真髓は次の言葉に集約されている。

「全体、支那を日本と同じやうに見るのが大違ひだ。日本は立派な國家だけれども、支那は國家ではない。あれはたゞ人民の社會だ。政府などはどうなつても構はない、自分さへ利益を得れば、それで支那人は満足するのだ。」(『米川清話』)

この表現のなかには、まさに「帝力、いづくんぞ我にあらんや」といわれる『十八史略』以来の中國人の政治

意識が美事にとらえられており、「支那は國家ではない。あれはたゞ人民の社會だ」看做す中國像こそ、今日の毛沢東体制においても、毛沢東自身がいくたびか挑戦して捕捉しきれないでいる中国社会の茫洋とした柔構造とその密教的性格を衝く木物の認識である。

海舟のこのような中國像を、だから、いわゆるアジア主義として一括することには無理があろう。海舟の日鮮提携論や中國像には、のちのアジア主義者たち(樽井藤吉や大井憲太郎ら)のアジア連帯觀や支洋社流の大アジア主義のように、孫文の革命と結んだある種の使命觀ないしはラディカリズムがないし、岡倉天心のような直情的アジア主義とも異なっている。

その中國認識は、清の政治家たちとの海舟自身の交流によつて体得されたものであると同時に、おそらく、海舟が「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見たそれは、横井小楠と西郷南洲とだ。」と述べて西郷と並べて畏敬していた横井小楠の中國認識の影響を受けているのではないかと思われる。小楠は、「堯舜孔子の道を明かにし、西洋器械の術を尽くす」、つまり東洋道理と米歐文明の融合のなかに日本の進路を見出そうとしたが、同時に日中兩國が「唇齒輔車」の關係にあることを力説し、アヘン戦争以来の中國の衰退に目を奪われて中國輕視→西洋重視の方向へ大きく動いていった幕末の知識人たちのなかではきわめてユニークな存在であつた。

ところで、周知のように福沢諭吉の「脱亜論」は、そ

「戊辰の際に於ける日記」考

松浦 玲

の短い政論的メモであったにもかかわらず、そのような幕末以来の明治知識人の移ろいゆくアジア認識、中国認識を背景にして出現したものであった。論吉は、「脱亜」のなかに文明日本の方向を定めようとしたのだが、一方、日本海軍の生みの親として日本の開明化に心血を注いだ海舟が最後に辿り着いた地点こそ「入亜」であったのだとしたら、海舟と論吉の対照はいよいよ鮮やかになる。

論吉は「拙我慢の説」において海舟を批判し、海舟はそれにはたいし、「行蔵は我に存す。毀誉は他人の主張、我に与らずと存候」と答えたのだが、この論吉と海舟の論戦の背景に中国認識の差異を軸にした「脱亜」と「入亜」の論争がかくされてきたとみることもできなくはない。

これまで、アジア主義について書かれたものには、どうしたことか、海舟のアジア認識ないしは中国像についての言及は一切ない。海舟の中国についての言説は隠遁者の随感にしかすぎないと思われたのであろうか。

やがて海舟が没する明治三十年代になると、日本はすでに論吉の「脱亜論」の道を現実のものとしていったが、同時にこのような現実とは、いつの日か海舟の中国認識の深い奥行きを再評価すべきときが訪れることを秘かに示唆しはじめていたのである。

やはり海舟の中国認識については、これまではほとんど見逃されてきたのだといわざるを得ないようである。

(東京外国語大学助教授)

る。こういう具合に勝手に海舟にしゃべらせ、吉本の手口については、われわれの全集の『水川清話』で詳しく解説しまた注記しておいた。

他の場合でもそうだが、ここでも、吉本のつくりかえは、単に海舟にしゃべらせただけにとどまらない。国民新聞記者は「戊辰の際に於ける日記」と言っているのに、吉本は「維新前に書いたおれの日記帳」と海舟に言わせている。

談話の現場におらず、『国民新聞』からリライトしただけの吉本製には、おそらく「戊辰の際に於ける日記」ということの意味がよくわからないままに、いかげんに書きかえたのだろうか、この違いは大きい。浪田蔵書と印刷された罫紙が使われているのは、「維新前に書いたおれの日記帳」という表現から感じとれるような漠然とした幕末期の海舟日記一般ではなくて、国民新聞の記者が目をつけて質問したように、まさに「戊辰の際に於ける日記」——いまそのコピーが私の机にある『慶応四戊辰日記』——なのである。そうしてこれは、海舟にとって特別の日記なのだ。しかし、他人が聞き取って記録した海舟談話を、甚だ無責任に自分好みに書き変えているだけの吉本製は、そんなことに全く注意を払わなかったのである。

さて、いま私が推察しているところでは、この浪田蔵書罫紙に書かれた『慶応四戊辰日記』は、戊辰の際、すなわち幕府倒壊のときの海舟日記の「草稿」とも言う

『吹塵録』に並行して、『幕末日記』の作業を進めており、いま海舟自筆本の一つ『慶応四戊辰日記』を検討しているところである。これは「浪田蔵書」と印刷した罫紙に、ずいぶん荒っぽく走り書きしてある。

この日記と「浪田蔵書」という罫紙のことは、『水川清話』に出てくる。若き日の海舟の後援者だった浪田利右衛門の話のところである。

吉本製は、この話を、海舟が「これは維新前に書いたおれの日記帳だが、この罫紙に浪田蔵書という書が入つたのを見なさい。これはおれの大切な記念物で、話せば長いが……」と語り始めたことにしているのだが、本当はそうでない。吉本がつくりかえる前の『国民新聞』明治三十一年三月十九日の「水川伯の談話(五)」でみると、「先生が戊辰の際に於ける日記を書せる罫紙の背面に浪田蔵書と刻しあるを見て、是は何人に候や、先生の御物に浪田とあるは訝かしと問へば、……」と始まっていて、疑問を抱いた記者の方から質問したのであ

べき性格のものだったようだ。事態收拾に走りまわってキチンとした日記をつけている余裕がないので、とりあえず忘れてはならないこと、また手紙や建書の下書あるいは控などをなぐり書きした。そのために使った紙が、以前に浪田利右衛門から買ってまだ残っていた浪田蔵書罫紙だったのである。

毎日ではなく、とびとびに、これはどうしても、ということだけを書いて行き、戊辰つまり慶応四年(＝明治元年)の正月二十九日まで来たときに、海舟は考えるところがあって、この特別の日記の自序ともいふべき文章を二つ折り二枚四頁にわたって書きつけ、前の方へ綴じ足した。

更に、二月二十五日の早朝、また思うところがあって、正月二十九日付自序の最終ページ余白に、自序の補足感想を「再記」したのだが、余白が足りなくなり、日記の元来の第一ページ欄外に一行書いて、やっと収まった。この日記を海舟は、あとで整理して、自分の普通の日記の体裁にするつもりでいたのだけれども、それができないままに殺されるかもしれない。そうなった場合には、この略式草稿のような日記が残る。もし殺された場合には、このなぐり書きでもって自分の真意を察してくれというものが、二月二十五日晩の「再記」である。

だが、幸なことに、海舟は死なずに済んだ。そこで、予定どおり、この「略式草稿日記」に、おそらくは他の日付メモなどを加えて、『整理された日記』が編まれた